関西自然保護機構会報12:63－76，1990

猪名川自然林は自然林でいられるか

猪名川自然林の植生調査及びその保護についての試案

柳　楽　　忍
（猪名川の自然と文化を守る会）

1．はじめに

この調査は，昭和59年12月から翌60年４月にかけて，猪名川自然林の一部分について実施したものである。本稿はこれをまとめ，「植生調査結果及びその保護についての試案」と題して個人的に報告書の形としてまとめたものである。本稿をまとめるに際して大阪市立自然史博物館の布谷知夫先生に御助言をいただいた。深く感謝の意を表したい。

2．猪名川自然林保護運動について

猪名川自然林は兵庫県尼崎市北部にあり，大阪府豊中市との境界にある（図１）。かつて猪名川の流れは大きく蛇行していたが，これが洪水等の原因となることからショートカット工事が行なわれた（図２）。残った蛇行部分は区画整理され，全て住宅地になる予定であったが，昭和42年からの長期にわたる保護運動により，図２に示すような成果をあげることができた。昭和58年４月には，この成果に対して第１回朝日森林文化賞自然保護部門奨励賞（朝日新聞社主催）が与えられた。猪名川自然林のもとの状態や保護運動の経過について，詳しくはKONC会報№18，37～51ページを参照してもらいたい。

3．２度の植栽と５年後の変化

調査範囲とその変化

調査範囲は保存された地域のごく一部と旧堤防の東斜面に限定した（図３）。この旧堤防部分

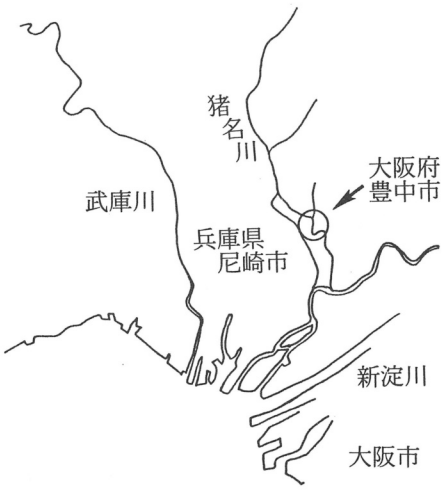


図１．猪名川自然林の位置，○印

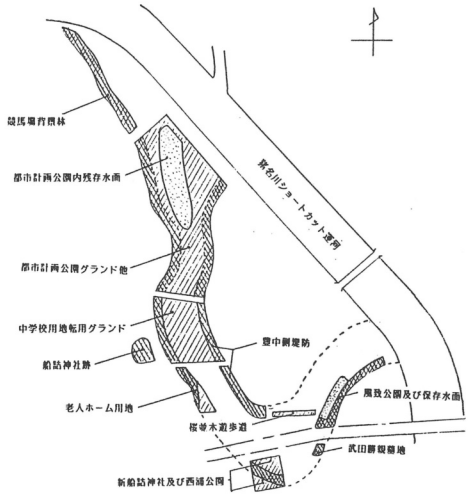
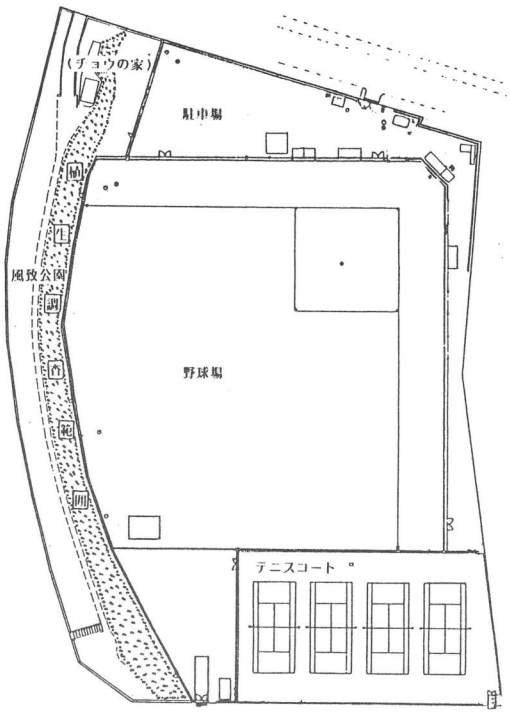


図２．蛇行していた頃の猪名川の流路とショートカット工事，猪名川自然林保護運動の成果も示す。

図３．調査範囲（旧堤防東斜面）



は，風致公園として残されたものの一つで，他の自然林部分と比べて，かなり荒廃した所であった。なぜなら，園田競馬場から帰る自動車が堤防上を通り，樹木のない空隙化した部分にはゴミの投棄が目立っていたからである。しかし，保存が決まり，風致公園となってからは，自動車の通行は禁止となり，アスファルトがはがされ，土の道が復活した。さらに昭和54年，55年の二度にわたり，樹木の補植が空隙化した部分に行なわれた。したがって，この調査は人工的に植栽された樹木も含んでおり，これが今後どの様に変化するかも重要な課題である。

また河川敷であった部分についても変化があり，区画整理工事が始ると，流路は埋立てられてしまった。堤防部分の保存が決まった時点では，自然林の維持存続に有利なよう，河川敷部分はなんらかの公共用地として使用することが合意された。その結果，中学校用地として買い取られたが，中学校は建設され

表１．昆虫の好む木

樹　木	昆　虫（蝶）
コナラ☆　クヌギ☆　ミズナラ	ミヤマセセリ
アワブキ	アオバセセリ　スミナガシ
クス科　タブ☆　クロモジ☆	アオスジアゲハ
オガタマノキ☆	ミカドアゲハ
ミカン科　イヌザンショウ　キハダ カラスザンショウ　コクサギ	アゲハ　クロアゲハ　カラスアゲハ ナガサキアゲハ　モンキアゲハ
マメ科　エニシダ	キチョウ　モンキチョウ
ウラジロガシ　イチイガシ	ムラサキシジミ
シリブカガシ　マテバシイ☆	ムラサキツバメ
コバノトネリコ　トネリコ	ウラキンシジミ
コナラ☆　クヌギ☆　アベマキ　ナラガシワ	アカシジミ　ウラナミアカシジミ　ミズイロオナガシジミ　オオミドリシジミ
ハンノキ　ヤマハンノキ	ミドリシジミ
フジ　クズ	トラフシジミ
エノキ☆　エゴノキ　ケヤキ☆	オオムラサキ　ゴマダラチョウ　テングチョウ ヒオドシチョウ
スイカズラ　タニウツギ	イチモンジチョウ
カエデ類	ミスジチョウ
シモツケ☆　コデマリ☆　コゴメバナ	ホシミスジ
サルトリイバラ	ルリタテハ
ヤナギ類	コムラサキ

ずに終わり，しばらくはバッタやカマキリが棲息する広場となっていた。昭和62年になると，野球場とテニスコートが造成され，今日に至っている。

尼崎市緑政部による植栽

前述の空隙化した部分の植栽のうち，昭和54年度を第一次植栽，55年度分を第二次植栽と名付けて，以下にその資料を示す。

（1）第一次植栽

旧堤防部分の植栽については，子ども会（猪名川の自然と文化を守る会子ども会，KONC会報№18,41～43参照）は虫の好む木を，たくさん植えてほしいと要求した。これにともなって，奥谷禎一神戸大学教授（当時）に「昆虫の好む木」（表1）の一覧表を頂いた。星印のついている樹木は，第一次植栽時に植えられたものである。第一次植栽は，翌年になると枯れる苗木がかなり多くなっていた。

（2）第二次植栽

第二次植栽では，前年に植栽されたものに比べ，苗木は太く高いものが用いられた（表2）。昭和55年に子ども会の要求していたチョウの家（昆虫アミ室）が完成し，そのまわりをカラタチの垣根で囲んだ。またこの工事の際，第一次植栽の一部分が失われた。

表2．第二次植栽表（昭和55年）尼崎市緑政部作成

凡例	樹種名	形状寸法 高さ	幹周り	巾	立本数	設計数量	単位当り客土	設計客土	備考	補足
㋕	ケヤキ	3.5m	0.15m	m		35本	0.05	1.75㎥	二脚鳥居	
㋖	クスノキ	3.0	0.15			32	0.05	1.6	〃	
㋗	シイノキ	3.0	0.12			20	0.03	0.6	〃	
㋘	モチノキ	3.0	0.12			20	0.03	0.6	〃	
㋙	タブノキ	3.0	0.12			26	0.03	0.75	〃	両斜面
㋚	ヒメユズリハ	2.0		0.6		15	0.03	0.45	〃	
◎	クロガネモチ	2.5～2.8	0.1内外	（支給材）		32	0.03	0.96	〃	
○	アキニレ	2.5内外	0.06内外	（〃）		45	0.03	1.35	一本支柱	
	ヤブツバキ	1.5		0.4		53	0.03	1.59	一本支柱	
	アラカシ	1.5		0.5		55	0.03	1.65	〃	
	ネズミモチ	1.5		0.4		45	0.03	1.35	〃	東斜面
	トウネズミモチ	1.0～1.2		（支給材）		55	0.01	0.55		
	サンショウ	0.8				70	0.01	0.7		アミ室まわり
	トベラ	0.6内外		（支給材）		190	0.01	1.9		
	ヒサカキ	0.3		0.25		120	0.01	1.2		
	ウバメガシ	0.8		0.2		110	0.01	1.1		
	カナメモチ	0.8		0.15		100	0.01	1.0		西斜面
	ネズミモチ	0.8		0.2		120	0.01	1.2		
	アラカシ	1.0		0.3		190	0.01	1.9		
二	カラタチ生垣	1.0				234	0.01	2.34	35.2÷1.5×10	アミ室まわり
								24.5		

調査のきっかけと方法

前述してきた経緯が，調査対象としている風致公園（旧堤防）にはあるが，旧猪名川の流路がまだ残っていた頃から一群のイヌビワの木があった。しかし，すでに樹勢が衰えていたようで，実は黒熟せずに，赤や緑のまま硬くしなびていた。

この調査のきっかけは，この一群のイヌビワの木が，枯れてなくなろうとしていることに気がついたからである。またせっかく昆虫の好む木を植えてくれたものが，ほとんどみあたらなくなっていたこと，また以前は荒れた感じのした場所の植栽木が成長して，かなり変化してきたこと，このような変容をもう少し正確に記録できないものかと考えたことが，この調査のきっかけである。

調査方法は，旧堤防上の小道から，東斜面基部まで，10ｍの糸を２ｍ間隔で３本はり，その範囲内にある樹木すべてに，番号をうち記録した。この10ｍ×４ｍの調査区域を順次移動し，最終的に48カ所を調査区域にした。なお番号を打ち，記録した木は，計550本だった。

記録方法は平面図に，樹木位置，ナンバー，枝の広がりを図４のように描いた。この他にイヌビワ枯死木，ネザサ範囲，崩壊面なども記入した。記録表には，ナンバー，種名，胸高周囲，樹高，Ｋ or Ｓ（既存木or植栽木）を記録した。他に断面図を主な場所のみスケッチした。

既存木について（調査結果１）

（１）既存木とは

既存木とは，もとからあった木，すなわち川岸林を構成していた木のことで，植栽木とは，一線を画するべきものと考える。植栽木との違いは，次の様な特徴から，見分けることができた。

・既存木には，木を支える支柱がないこと。
・既存木は生えている間隔や密生状態が均等でないこと。
・既存木は比較的大木で，かつ園芸品種ではないこと。
・既存木は尼崎市緑政部の作成した植栽図に記載がないこと。

以上の特徴から既存木のすべてを図５に表した。実際には，すべての出現種ごとに同様の図を作成したが，それらは省略し，イヌビワ枯死木分布図のみを図６に示す。表３には，既存木の一覧表とそれぞれの本数を示した。

（２）既存木の階層構造

既存木には高木，亜高木といった階層構造が明らかに見られる。既存木だけで構成された部分の断面を図７に表わす。

高木層には，ムクノキ，エノキ，ケヤキが優占し，亜高木層にはヤブニッケイあるいはヤブツ

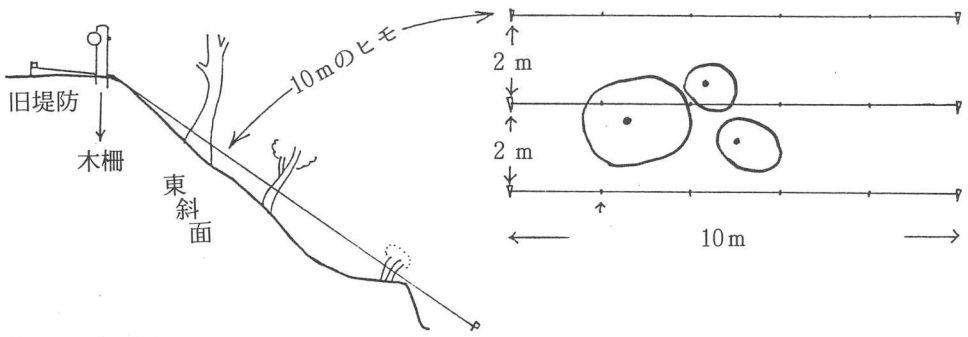


図４．記録方法　記録する図中に，木の位置・枝のひろがり・番号なども書きこむ。

図５．既存木図

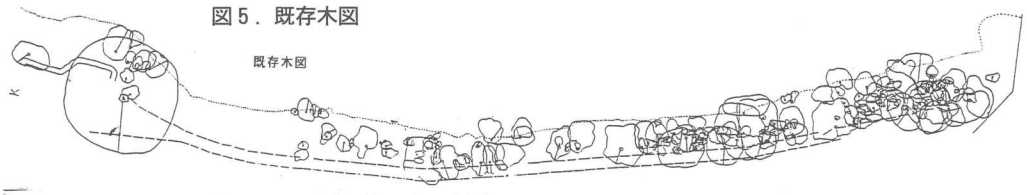
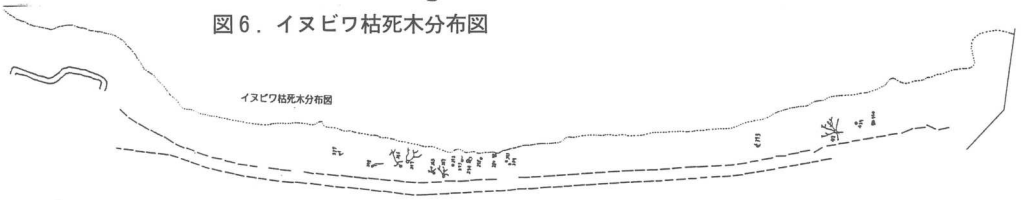


図６．イヌビワ枯死木分布図



バキが，底木層にはチャが，また林床にはテイカカズラ（あるいはアケビ）がかなり頻繁に見られた。このような構造は他の部分でも普遍的に観察され，猪名川自然林の骨格といってよいと思われる。しかし，川から切り離され，流路も埋立てられ，河川敷が野球場になった今日，植栽木との競合ともあいまって，どのように変化していくのか興味深い。

（３）崩壊面

図８の細かい点線で囲まれた部分，あるいは図７の下部段差部分がなんらかの原因によって，崩壊している所である。その原因は二つある。

表３．既存木一覧表

種　名	本数	備　考
ムクノキorエノorケヤ	23	調査した時期が冬であったため，ムクノキ・エノキ・ケヤキ，の３種類を見分けるのがむずかしかった。しかし，主体がムクノキであるため，わかりにくいものは全て，これに含めた。
エノキ	5	
ケヤキ	5	
アキニレ	1	植栽木との区別がつきにくかった。自然発生する木も多い。
クサギ	13	
ヌルデ	5	
アカメガシワ	4	
イヌビワ	20	ほとんどがかれている。生きていても，枯れた根ぎわからの萌芽であった。
ヤマハゼ	1	
センダン	1	
コマユミ	2	
ナワシログミ	1	
ヤブニッケイ	67	群生しているものは全て１．としてかぞえた。照葉樹の大半を占める。
クスノキ	3	植栽木より，よほど大きい。
ヤブツバキ	7	植栽木より，よほど大きい。
クロガネモチ	1	自然樹形であるところから植栽木と区別した。
マサキ	1	かなり大きな木。
チャノキ	17	低木層に優占的。

①河川敷を整地する際，工事によってできた段差であり，旧堤防に沿っている（写真２参照)。
②人が斜面を上り下りしたために，裸地となり，降雨によってくずれていく部分。これは旧堤防を横切っている。

また，崩壊面に，クサギ，ヌルデ，アカメガシワの分布図を重ねあわせてみた（図８)。これらの樹木の分布は，崩れた場所によく重なりあっている。すなわち，これら３種の樹木の大部分は，整地工事以降に生えてきたものであろう。

（４）ネザサ分布図

ネザサは樹木ではないが，近年めだって棲息範囲を広げているようなので，その広がりも調べてみた（図９)。また調査地以外の猪名川自然林においてもネザサの勢力は旺盛である。旧猪名川の流路がまだ変えられていなかった頃，水辺に近い所ではメダケが繁り，人が侵入できないほど，密生していた。今ではメダケは，ほとんど姿を消し，より乾燥に強いネザサが，それにとってかわっている（写真１)。ただしネザサは，崩壊面を保護して，より大きな崩壊を緩和しているように思われる。

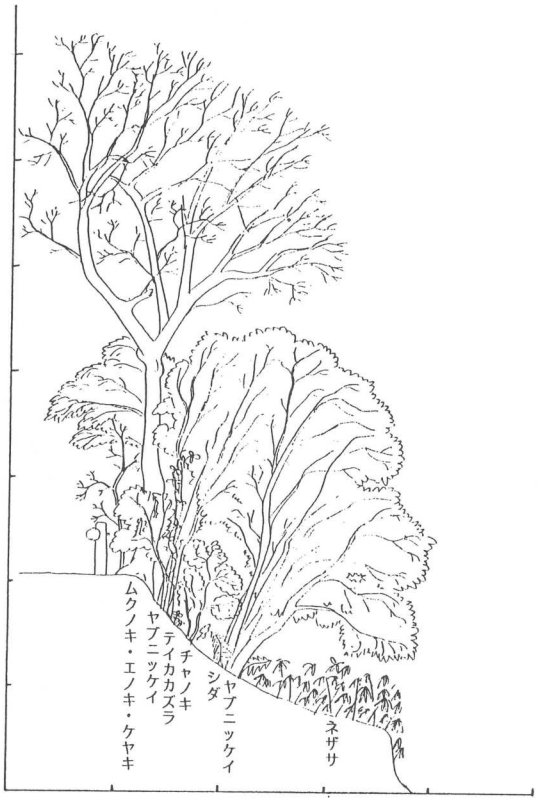


図７．既存木の階層構造スケッチ

（５）イヌビワ枯死木

調査のきっかけは，すでに述べたようにイヌビワの木が枯れだしたことに気がついたからである。やはり，調査範囲内のイヌビワは，すべて枯れているか，生きているとしても，枯れた太い木の根ぎわから，細い萌芽が伸び出しているだけ，という状態であった。イヌビワ枯死木の分布を図６に示した。イヌビワは明らかな衰退傾向を示し，遠からず，調査範囲内からは消失してしまうであろう。また高木層を形成しているムクノキの一本が枯れてしまっているのや，亜高木層のヤブニッケイが，幹やけをおこし，表皮がはがれているのを，所々で見うけた。


写真１．ネザサ
植生調査をした区域のちょうど東向かいにう自然林。（豊中市側）ここでは一面にネザサが繁っています。縁にあって邪魔になるものは刈取られ，それ以外はこのように残されています。

植栽木について（調査結果２）

（１）５年間の変化

第二次植栽から調査まで，５年の歳月が

図８．崩壊面及びクサギ・ヌルデ・アカメガシワ分布図

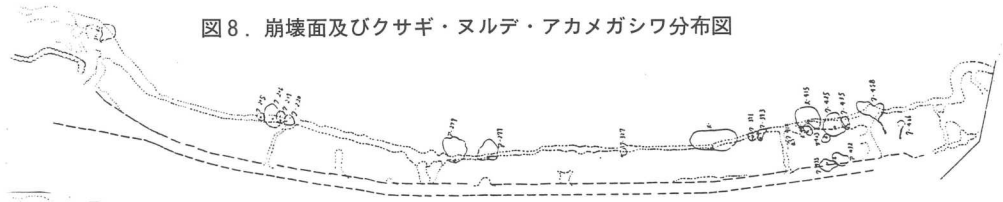
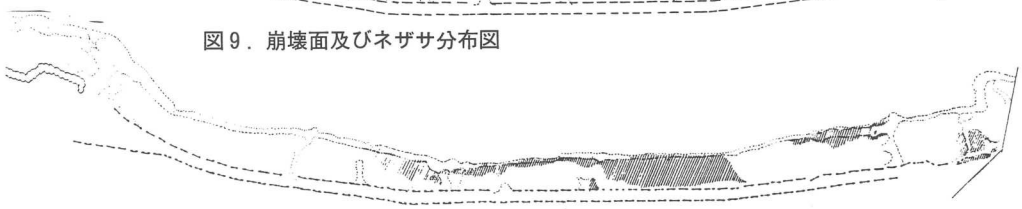


図９．崩壊面及びネザサ分布図



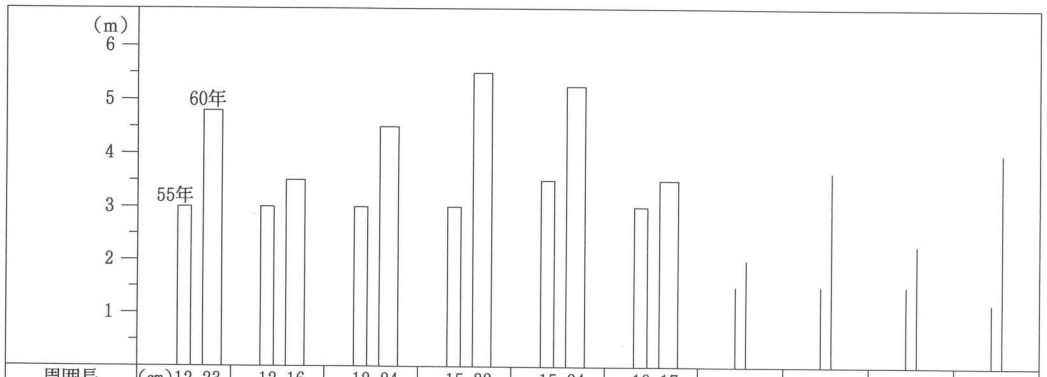
経過しているが，その変化を要約すると，「第二次植栽のものが，よく活着・成長し，所々に第一次植栽のものが生き残っている」という感想であった。この感想は表４によって歴然と見てとることができる。ケヤキは二次に植栽された23本が５年後も23本と変わりなく，一次に植栽された８本は消失してしまった。クスノキは17本から15本へと，２本だけ減っている。シイノキは８本がそのまま生きていることを示している。表中の第二次植栽の数量は，東斜面だけを，植栽図から読み取ったものであり，その数量より現存本数の多いものもあるが，西斜面を含めた全体数量の量大値をうわまわるものではない。モチノキのように，枯れているものや，枯れかかっているものが相当あった。ダブノキ・アラカシ・トウネズミモチはほぼ100％の生存率といってよく，樹勢もよかった。ネズミモチ・ヤブツバキは細長く，クロガネモチほどではないが，樹勢はよくなかった。

第一次植栽で100％生き残っているのは，ユキヤナギだけで，アキニレ・エノキ・ムクゲ・ヒイラギ・イスノキ・イヌツゲ・クチナシが生存率50％以下で，比較的よくのこっていた。現存本数が１あるいは０という種が17種と多く，第二次植栽と比べ，なぜこのように死亡率が高いのか理由は分っていない。

（２）５年間の成長率

表４．植栽木の本数と現存本数

樹木種名	第１次植栽	第２次植栽	現存本数
ケヤキ	8	(35) 23	23
クスノキ		(32) 17	15
シイノキ		(20) 8	8
モチノキ		(20) 8	16
タブノキ	30	(26) 17	34
ヒメユズリハ		(15) 2	2
クロガネモチ	26	(32) 12	20
ヤブツバキ		53	23
アラカシ		55	31
ネズミモチ		45	31
トウネズミモチ		55	42
カナメモチ		※	1
ヒサカキ		※	1
トベラ		※	8
アキニレ	22	(45)	8
エノキ	30		4+4
ヤマボウシ	30		1
ムクゲ	25		5
ハコネウツギ	50		1
ユキヤナギ	100		100に近い
セイヨウバクチノキ	30		1
ヒイラギ	30		17
シラカシ	7		1
テバシイ	30		1
イスノキ	30		9
イヌツゲ	15		7
クチナシ	100		12
ヤマブキ	100		0
レンギョウ	100		0
シモツケ	30		0
ハナズオウ	50		0
オガタマノキ	30		0
コデマリ	100		0
アセビ	30		0
ヤマハギ	50	( )の数は	0
コナラ	15	堤防全体に	0
クヌギ	15	植えられた	0
クロモジ	30	数	0
	1,113本 27種	172本以上 10＋3種	426本以下



周囲長	(cm)12 23	12 16	12 24	15 32	15 24	10 17				
種　名	タブノキ	モチノキ	シイノキ	クスノキ	ケヤキ	クロガネモチ	ツバキ	アラカシ	ネズミモチ	トウネズミモチ
高　さ（H）	160%	127%	150%	177%	149%	136%～121%	133%	233%	147%	390%～325%
胸高周囲（BDH）	190%	134%	201%	212%	157%	174%	——	——	——	——

図10. 植栽木の成長率　棒グラフは，各々の樹種について，左，55年植栽時，右，60年調査時点での平均的大きさを示す。大きさとは，縦軸が高さを，棒の横幅を幹回りの長さ（胸高周囲の平均）として表している。ツバキ・アラカシ・ネズミモチ・トウネズミモチについては，幹回り寸法の記載がないため表示していない。下部の百分率は，55年を100として，成長率をあらわしている。

第二次植栽の10種類について，５年間にどれくらい成長したかを図10に示した。これは緑政部作成の植栽図中の数値を手がかりに，調査区域№31までで試算したものである。このグラフで最も成長率の大きい木は，高さでは，トウネズミモチで，植栽時に比べて３～４倍，胸高周囲（太さ）では，クスノキ・タブノキで約２倍という値が目をひく。また成長の遅い木には，モチノキやツバキがあり，前述したように，枯れているものも多くあった。

（３）写真による比較

写真２・３は，８年間をおいて，ほぼ同じ場所を写したものである。空隙化の目立っていた部分に，植栽を施すことによって，かつては裸地であった斜面が，木々に包まれた。写真２は第一次植栽時のもので，中央にイヌビワの木の一群が写っている。写真３は調査時より２年後のもの



写真２．東斜面第一次植栽時



写真３．東斜面昭和62年（冬）

であるが，第二次植栽のものが成長し，第一次植栽やイヌビワの木が呑み込まれている。

（4）断面構造

図11は写真2・3の主に植栽木だけで構成されている部分を，断面として表したものである。これは，人が自然林を修復する場合，このようになるという一つの事例のように思われる。ただし，猪名川自然林全体に共通するものではない。また，既存木のようにはっきりとした階層構造が未だ見られず，次の諸点が特徴であると思われる。

・旧堤防基部には，ネザサのかわりにユキヤナギがある。
・トウネズミモチが壁のように蓋っている。
・林冠部に3種類の樹木がひしめいて，高木，亜高木の区別がはっきりしない。
・林床に固有の植物がない（たとえばテイカカズラなど）。
・各樹木間の間隔が均一で，自然に生えていた木々のように密でない。

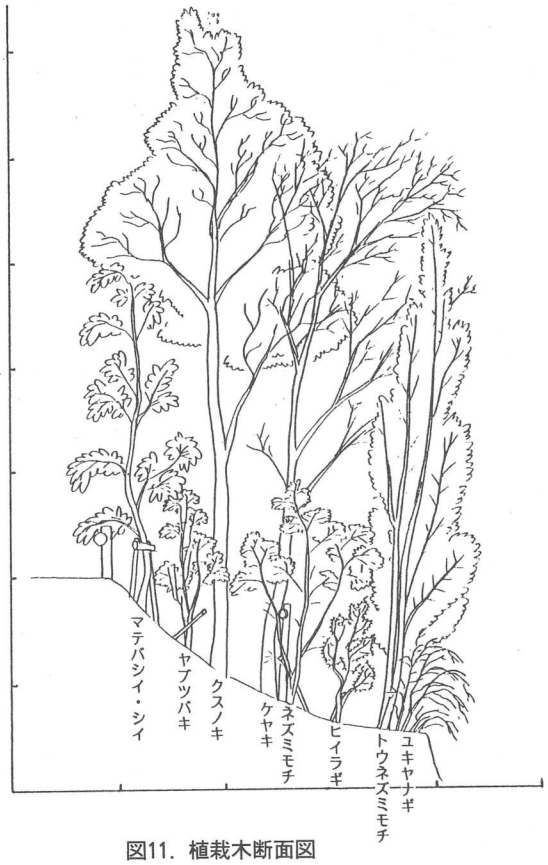


図11．植栽木断面図

このように人の作った林は，今のところ既存木のように整然とした空間的配置は見られない。たかだか5年程度では，りっぱな林は，復元できないだろう。

（5）植栽木図

図12は第一次・第二次植栽木の，調査時点で現存しているすべてを記入したものである。また図13は主な樹種の分布を示している。人が植えたものであるために，あまり意味はないかもしれない。しかし，緑化という観点からは，自然林の空隙化した部分を十分に補っていると思われる。また，タブノキなどの潜在植生を配置しているところから，スダジイ・タブ群落の復活を目指している，とも思われる。

4．自然林保護と保全の構想

調査地域は当初の計画では，すべて平らにならして，区画整理される予定であった。それが保護運動の成果として保全され，旧河川敷部分は公共用地として使用されている。かつて旧堤防上は荒廃していたが，二度にわたる植栽により，現在では木々のトンネルのようになった。しかし，

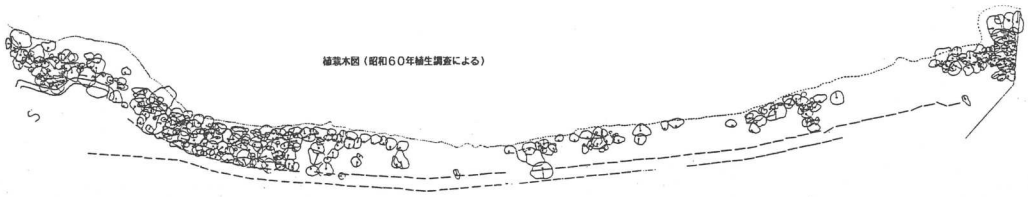


図12．植　栽　木　図

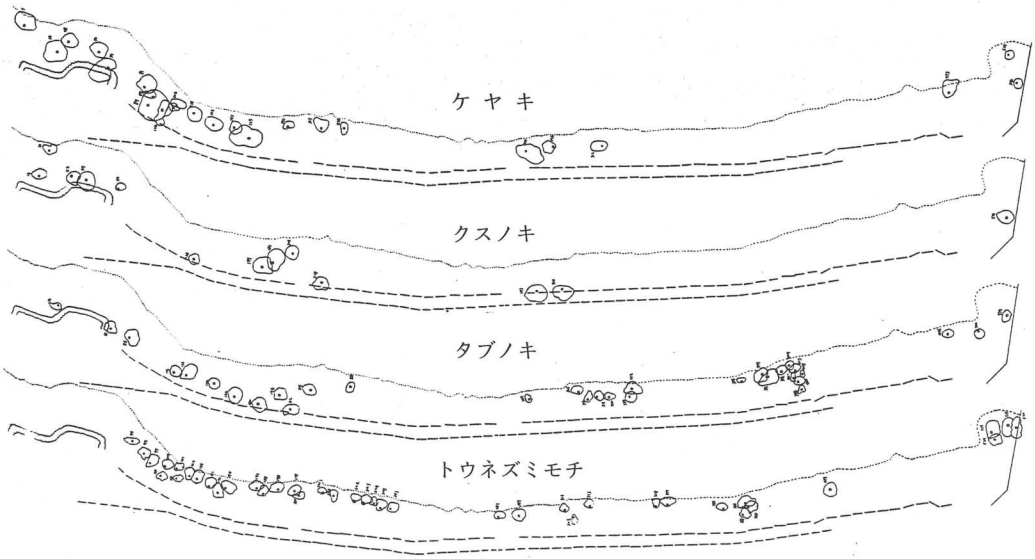


図13. 植栽木数種の分布図

子供たちの要求した第一次植栽「虫の好きな木」は全滅に近い状態である。また，第二次植栽の木々は大きく成長しているが，その樹種は，都市緑化によく利用される樹種がほとんどである。さらに，元からあった樹木には，衰退傾向がみられ，既存木の成長がどのようになるかが，今後の問題といえる。

自然林は自然林でいられるか

この調査をまとめ，猪名川自然林の未来の姿を予想してみた。イヌビワが全部枯れていたことや，大きなムクノキが枯れかかっていたこと等から，かなり危機感をもっている。

（1）前提となる事実の確認

・「川岸林」という特徴ある森林が自然の営みによって形成されていた。

・これが猪名川自然林の本質であったが，河川改修工事によって，川の氾濫という自然の営みからは無縁になってしまった。

・更に，旧猪名川の流路も埋立てられ，調査区域では，水面が広場となり，やがて野球場になった。

・すなわち，保護運動の結果，かなりの部分が保護されたが，周囲の環境が変化した事によって，残された自然が，違った自然に姿を変えていくことは当然なことである。

（2）考えられる一つの経路

問題は姿を変えていく方向にある。ここで猪名川自然林がたどるであろう一つの経路を予想してみよう（図14）。

まず，既存木の衰退傾向は，今後もなお続くだろう。どの木が枯れるか，それは正確に予側できないが，東にある木よりも西にある木の方が，あるいは林縁植物よりも骨格をなす樹木の方が，枯れる条件は揃っている。既存木が枯れたあとには，ネザサが侵入する。もし，その場所に植栽木が十分に覆いかぶさっているようなら，ネザサは侵入しないが，そのかわり人の踏圧と，雑草刈り取りによって，なにも生えなくなるだろう。人の踏圧と雑草刈り取りは，さらに崩壊面の崩壊を助長する。

一方，植栽木は成長を続け，かなり大きくなるだろう。しかし，その中でもいくらかは枯れるものもあるだろうし，成長の早かった樹木は，案外，寿命が尽きるのも早いかもしれない。結果的に植栽木・既存木を問わず，強いものが残り，島状にあるいは独立木になって点在し，その間をネザサが覆い，中には違う種類のタケも生えてくるだろう。やがてタケ・ササ類の開花が起ると，後に枯れてしまう。しかし，すべて枯れてしまうのではなく，これも島状に残るだろう。そしてなにも生えていない裸地が大部分を覆うようになり，降雨によって浸食されやすくなる。その結果，島状に残る樹木とタケ・ササ類がある場所は，浸食されずに残り，裸地は浸食されて谷となるので，過去に堤防であった場所は，小山の連なりとなる。一つの小山は，いくつかの樹木と一群のササの単純な構成となり，子供のままごとによってさえ容易に崩れていくだろう。

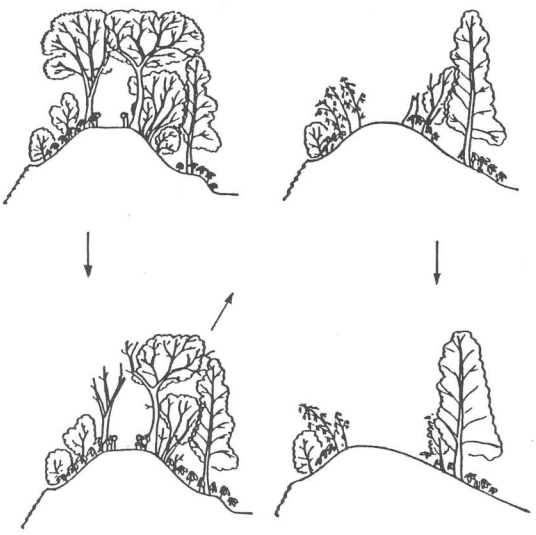


図14．予想される一つの経路

こうなるまでに，どのくらいの時間がかかるかはわからない。いえることは，人の日常生活では気付かないような，ゆるやかさで，進行するということである。猪名川自然林のすべてが，このようになるとはいえないが，少なくとも調査区域が，このような経路をたどることは必然的なことのように思う。また人はこのような変化に気付いた時，再び植栽をするだろう。しかし，それが今までと同じ緑化の手法によるものならば，ただ延命効果があるだけで，遠からず自然林は雲散霧消してしまう。

保護についての試案

以下には，懸念される事態の解消をめざし，具体的な案を示す。

（1）チョウの家

すでに，昭和55年，尼崎市の援助によって昆虫アミ室（7ｍ×4ｍ）が完成している。カラスアゲハの復活をおもな目標にし維持管理等は子供会（前述）が行なっている。

（2）チョウの庭

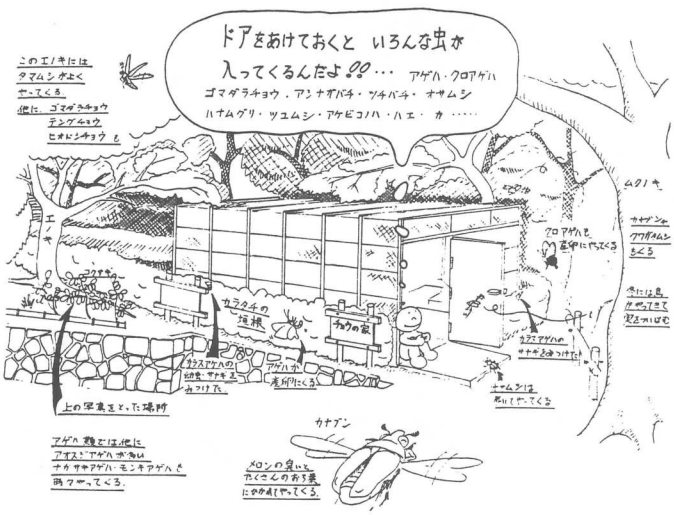
写真5の手前駐車場と，旧堤防との間には，ささやかなスペースがある。これは野球場造成以前から，子供会が設置していた，カブトムシの飼育箱（図16中の落葉の箱）をそのままにしておくために，駐車場にならずにすんだ場所である。土留めをした落葉溜まりや花壇に，チョウの好きな木や草を植え，ちょっとした観察会ができるように，木のテーブルを置く。

（3）崩壊面とフェンスの間の工夫

崩壊面と野球場のフェンスの間には，平均1.5ｍほどのわずかな空隙がある。これを図17のようにすることによって，崩壊をくいとめ，実生による木々（クサギ・アカメガシワ・ヌルデ・ヤブニッケイ・ケヤキ・エノキ・ムクノキ・アキニレ等）を選択的に生育させる。

（4）旧堤防上の小道

風致公園にすることによって，アスファルトがはがされ，土の道が復活したが，降雨あるいは，



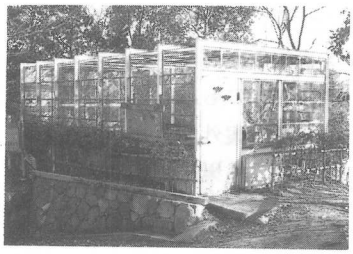


図15. チョウの家のまわりでは
写真４．チョウの家

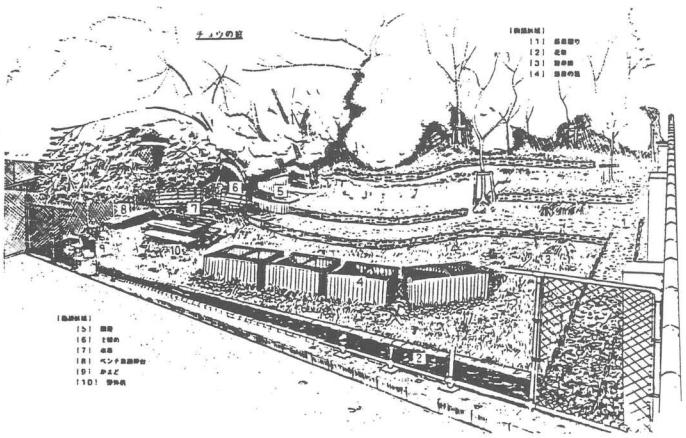




図16. チョウの庭計画
写真５．チョウの庭

人の踏圧や雑草刈り取りによって，裸地化している。これを「虫の好きな草」あるいは，崩壊防止のための植生によって覆う。

（５）駐車場と野球場外野及びその他

野球場のフェンスに，チョウの好きなツル植物（フジ・スイカズラ・ウマノスズクサ・キジョラン）をからませ，外野の縁に沿って，木路をつくる。またテニスコートと旧堤防との間のスペースには木陰をつくる。駐車場側にも，フェンスに沿って生け垣や花壇があればよい。

以上の（１）から（５）まで総合して「チョウの観察路」とする計画である。チョウをはじめとした昆虫が棲みやすい環境を創り出していくことが，猪名川自然林の保全につながること，また，そこを自然観察の場とすることによって，多くの人々がこの林を知ることこそ重要であるといいたかったのである。

しかし，その後，この計画は（１）以外は実現していない。それは，主に財政的な裏付がないことによる。

5．まとめにかえて

現在の社会状況は，私たちが保護運動を始めた頃に比べると比較にならないほど，自然保護や環境保護に対する認識が，鋭くなっている。連日，新聞やテレビが，これらの問題を，こと新しく宣伝している。実際に私たちに身近な環境も，より悪化しているように感じる。例えば，あちらの竹林が建設資材置場になったとか，こちらの川岸に鉄杭が打ち込まれたとか，むこうの寺の森が削られて道路がついたとか…試案として例示した具体案も，「悪くなっていくであろうから，なんとかそれに対応していこう」という対症療法的な発想であることも，いなめない。

このような現状の中で，猪名川自然林が，尼崎市においては唯一といっていい自然的環境である事は，以前と変わりはない。また，さらに時を経るにしたがって，保護運動の中でいわんとしたことが，より鮮明に浮び上がってくる思いがする。つまり，保存した場所に，自然教育園をつくろうということである。今回，調査区域とした旧堤防に隣接する，旧河川敷部分は，公共用地として使用する事を条件に合意が成立した場所で，この場所は自然教育園あるいは，その敷地の一部としての第一候補地である。ここが中学校用地から，野球場に変化してきたことは，前述した。私は，野球やテニスで汗を流すことを否定するものではない。むしろ，そのような施設が数多くあることを歓迎する。しかし，野球やテニスは，猪名川自然林以外の場所でもできることで

図17．崩壊面とフェンスの間計画

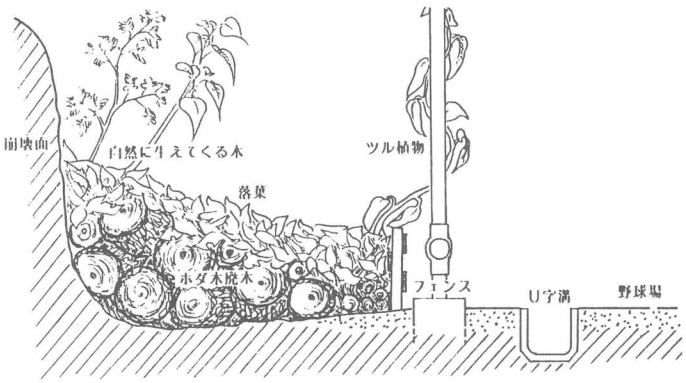


写真６．旧堤防上の小道

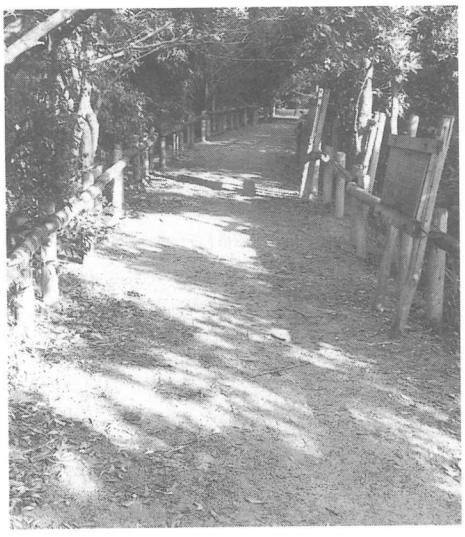


図18．旧堤防上の小道計画



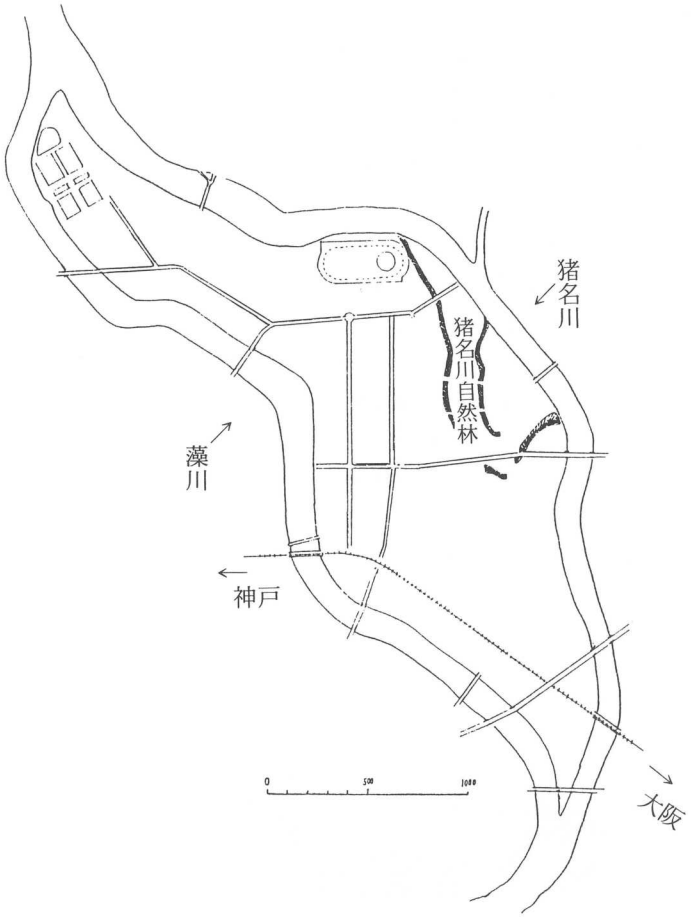


図19. 猪名川・藻川に囲まれた地域を自然回復のためのモデルに

あろう。この場は，この場でしかできないことに利用してほしいし，それがすなわち，自然教育園であると思う。

加えて，この自然教育園を拠点とした地域作りについて，私は次のような提言を行なったことがある。

「地球環境が云々される今日，熱帯雨林の減少やオゾンホールの拡大というような現象を私たちはややもすると他の国の出来事のように受け取ってしまいがちです。しかし，真の問題は，私たち自身の生活様式や生き方といった所にその根源があり，今自分の立っているこの場が地球そのものであることを認識すべきだと思います。いわんや，尼崎市はかつて公害都市としての経験を有し，今度はそれを逆に未来への資産として活用しなければなりません。「未来への資産とはなにか…？」それは，環境とは何かを問い直す目であり意識であり，又自然環境の回復・復元，そして創造であるべきです。

私の環境づくりへの提言は（猪名川・藻川に囲まれた地域を自然回復のためのモデルとすること）です。例えば，両川を人工的な施設で覆うことなく，魚の産卵場，カモの観察地，カワセミの水辺というふうに見なし，それを回復する。また地域内に両川から引き込んだ小川を造り，ホタルが舞い，ツクシが生え，魚が泳ぐようにする。あるいは緑地や神社等を自然の小道（猪名川風致公園のような）でつなぎ，これに蝶の道，竹の子の里，カブトムシの林というような特徴を持たせる…等々。このような自然の創出は，将来を見越した老人福祉であるし，子供の環境教育の現場ともなります。また実生活面からも，家庭廃水や，自動車を乗り入れてはいけない所はどこか，といったモラルの形成に役立ちます。そして，これらを統括する自然教育園を設立し，環境設計や普及活動等からその意義づけを行ないます。さらに猪名川水系全体を視野に入れ，両川に囲まれたこの地域を，自然と文化の拠点となすことが，国際的な道を開くことになると考えます。」

以上は，尼崎市環境保険局が募集した「身近な環境づくり市民提言（平成２年３月）」に応募した文章である。これを終わりの言葉にかえる。